

令和元年度「全日本中学生水の作文コンクール愛媛大会」

(知事賞) 奨励賞

私は今日も水に飛び込む

済美平成中等教育学校 二年 中野 優

プールサイドに立ち、飛び込む瞬間が私は好きだ。ゴーグル越しに見る水中は、透き通っていて、私の心を元気にしてくれる。

家族旅行で沖繩に行った。海のブルーが輝いていた。太陽の日差しを浴びて、水面はキラキラ宝石のように光っていた。美しい。私は、幼い頃から、水は大切だと認識する以上に、水は美しいと疑いもせず過ごしてきた。しかし、競泳の練習で体に水を感じながら泳ぐ日常や、日本の川や海の美しさは、世界から見ると当たり前のもものではなかったのだ。

平成29年12月、私は母と、世界の環境問題を調べていた。そこで初めて、インドネシアの「チタルム川」を知った。私と同じぐらいの年齢の少年が、ゴミだらけの川に、口が水に浸かった状態で泳いでいた。この川は「世界で最も汚染された川」と呼ばれているという。驚き以上に、悲しみが込み上げてきた。また、川の周りには約五百万人もの人が住み、この川の水を給水源として利用しているというのだ。人々による六百万トンの廃棄物がこの川には流れ出て、生活用水として、不衛生な水を使うことで毎年五万人もの死者を出している。もちろん、下水処理などはされていない。

毎年失われている五万人の人々の命は、失われなければいけない命なのか。知っても何もできない自分の無力さを感じた。

水面が見えないほどのゴミで埋め尽くされた川の上に、ボートを漕ぎ進めている青年の写真があった。彼は、ゴミの中から、使いそうなものを集めている。

この青年の「水」へのイメージはどのようなものなのか。きっと明らかに私とは違っている。むしろ、「水」とは危険なものなのではな

いだろうか。しかし、生きるためにこの水を使う。生きて生活していくために、死を覚悟しながら、この水を使うしかない。

安全で保障された生活用水を使うことができる日本が、どれほど恵まれているのか、私は改めて胸にしみる思いがした。

同時に、この川の水を安全に使うための取り組みなどはされていないのかと不思議に思い調べてみた。

すると、今年から日本政府が支援に乗り出すことがわかった。ジョコ・ウイドド大統領は浄化に取り組む七年間の計画を打ち立て、その協力を日本に要請したとのことだ。日本政府は今まで全く関わってきいていなかったわけではなかったようだが、水質改善の協力は初めてだという。具体的には日本の排水処理技術を伝授していくのだという。私は、少しでも早く、現地の水環境が改善され、そこに暮らす人々の未来が確実に明るいものになるように、ぜひ日本政府の力を発揮してほしいと強く感じた。同時に、他国から要請を求められるほどの日本の技術により、私たちの生活が守られていることも知った。

美しいと疑いもせず、全身で気持ちいいと水を体感できることは、決して当たり前ではない。

私は無力で、チタルム川のことを知っても何もできない。しかし、知ることにより、それを伝えることはできる。また、呼びかけることもできる。学ぶこともできる。そして、その呼びかけの輪が広がれば、きっと、何かの役に立つかもしれないし、大きな力に変わるかもしれない。そんな気持ちを持つようになった。もしかしたら、その力は、美しい日本の水資源を守っていくことにもつながるのではないだろうか。美しい水資源を、私たちは未来のために守っていかなければいけない。

今日も私はGoogleを見つけ、しっかりと水中にもぐり、水を全身で感じる。感謝の気持ちを持って。そして、美しい水を守りたいと思っ